

信越化学工業株式会社

2026 年 3 月期 第 2 四半期 決算説明電話会議要旨

日 時	2025 年 10 月 24 日（金） 16：30 - 17：30
開催場所	信越化学工業（株）
会 社 側 出席者	・ 代表取締役社長 齊藤 恭彦 ・ 取締役兼専務執行役員 半導体事業担当 轟 正彦 ・ 常務執行役員 広報担当 秋本 俊哉 ・ 執行役員 経理部長 笠原 俊幸 ・ 広報部長 福井 真二
参考資料	・ 2026 年 3 月期 第 2 四半期（中間期）決算短信

* このメモは電話会議でお話した内容をまとめたものです。

【決算概要説明（社長 齊藤恭彦）】

- 2026 年 3 月期 第 2 四半期（2025 年 7-9 月期）
連結売上高： 6,559 億円（前年同期比 2%減）
営 業 利 益： 1,671 億円（前年同期比 22%減）
経 常 利 益： 1,857 億円（前年同期比 17%減）
当期純利益： 1,314 億円（前年同期比 12%減）
- 前年同期比では減収減益だが、この 7 月に公表した予想の水準に沿った数字で、当該期を締めくくることができた。

[セグメント状況]

- 【生活環境基盤材料】：
 - ・ 北米国内の塩ビ需要について、7-9 月の国内販売は夏場の季節要因に加え、今年残りの 3 ヶ月の需要を慎重に見る向きが数字に表れた。実際、業界統計によれば、7-9 月の国内販売は今年 4-6 月比で 7%の減少となった。ただ、前年同期比では変わらずであった。
 - ・ 市況全般としては、中国からの輸出が主因で需給は緩んだままであり、北米の市況がそれに引きずられる傾向が生じた。北米の価格水準をこれ以上下振れさせる意味も理由もないため、反転に取り組んでいく。
 - ・ ソーダの市況は、7-9 月は 4-6 月に比べやや軟化したが、ここでも切り返しに取り組んでいく。

- 【電子材料】：

- ・ 電子材料は、AI 関連市場の拡大に伴い先端分野が好調に推移している。また、PC やスマートフォン等、従来分野の市場は、米国関税の影響が明確には見定められないものの、向け先により底入れの兆しが出てきた。
- ・ 300mmウエハーの需要は今年 1-3 月期を底に、4-6 月期から回復基調を維持している。今後の展開は、各分野の需要と客先における在庫消化の度合いによるものと思う。
- ・ 露光材料は拡大基調を維持しており、供給能力の増強と拡充を急いでいる。
- ・ 磁性材料は、先々週の中国の輸出規制強化の発表を受け、需要はさらに高まると見ている。顧客との協議を進める一方、供給体制の多角化に取り組んでいる。

- 【機能材料】：

- ・ 本事業セグメントの第一課題は、当社の強みである機能品・特殊品を格段に伸ばすことであり、そこに集中している。3 年前と比較し、これらの製品群の割合が 11%ポイント上昇し、進捗している。

- 【加工・商事・技術サービス】：

- ・ 当セグメントの収益は引き続き安定している。

[貸借対照表について]

- ・ 9 月末で、借入金を差し引いたネットの現預金保有高は、昨年 12 月末から 3,280 億円減って 1 兆 2,580 億円となり、株主資本は 2,360 億円減って 3 兆 6,340 億円となった。この変化は主に今年行った大型の自己株式取得によるもので、今後も総還元性向を考慮しつつ、保有資金や創出される資金は事業投資に積極的に充てていく考えに変わりはない。

【補足説明（経理部長 笠原俊幸）】

- 【決算短信 11 ページ】：

- ・ 損益計算書の特別利益について、第 1 四半期同様、投資有価証券の売却益は政策保有株式に係るもの。また、前中間期の段階取得に係る差益は三益半導体の子会社化によるもの。

- 【決算短信 16 ページ】：

- ・ 投資額と減価償却費の年間予想は 4 月時点の予想から変更なし。

- 【決算短信 17 ページ】：

- ・ 貸借対照表について、海外子会社の換算レートは、2024 年 12 月末の 1 ドル=158.2 円に対し 2025 年 6 月末が 1 ドル=144.8 円と円高になったため、貸借対照表の金額が減少。
- ・ 貸借対照表の実質増減は、現預金が 1,103 億円の減少、有価証券が 533 億円の減少、長期借入金が 2,289 億円の増加で、ネット資金は 3 月末から約 3,900 億円減少してい

る。その他では、固定資産が 982 億円の増加、株主資本は 2,449 億円の減少。

● 【想定為替レート】：

- ・ 2026 年 3 月期の想定為替レートは、10 月以降について、1 ドル=145 円程度、1 ユーロ=165 円程度。
- ・ 想定レートを 7 月時点から 5 円程度円安方向に変更しているが、利益予想に対する影響額は 1-2%のため、業績予想は変更なし。

【質疑応答】

〈生活環境基盤材料〉

Q	シンテックの状況について
A	(2Q について) ・ 2Q (4-6 月) は 1Q (1-3 月) と比べるとほぼ横並びといえる減益です。 (3Q 以降について) ・ ドルベースの税前利益は、2Q から 3Q、3Q から 4Q (見込み) と残念ながら四半期ごとに落ちていきます。この要因はひとえに市況の下振れです。また、4Q には大定修があるので、販売量の減少も収益を下振れさせる要素です。 (来年の塩ビの年次契約について) ・ 今まさに交渉が始まったところです。当然価格は下げたくありません。下落を最小限に食い止めるという姿勢で交渉に臨んでいます。
Q	塩ビ市場の状況について
A	・ 海外で販売するよりも北米国内で販売する方が価格は良いという状況は、今年前半から変わりません。今年前半と異なる点として、北米国内の市況が海外の市況に引きずられる向きが出てきました。同業他社が、この状況がさらにしばらくは続くという見通しを持っているとするならば、行動も変わってくると思います。 ・ 北米国内の価格水準はこれ以上下げる意味も理由も全くありません。元凶は海外市況ですので、海外市況を含めてとにかく全方向で価格の修正に取り組んでいきます。 ・ 当社は塩ビの世界では第一人者ですが、いかんせん中国要因があり、市場が広く色々な動きがある中で、当社の力だけでどこまでできるか分かりません。それでもとにかく最善を尽くし、市況を反転させる努力をきちんと実行していきます。

〈電子材料〉

Q	半導体ウエハーの2Q（7-9月期）の市場動向について
A	・ 300mm ウエハーの業界の出荷数量は前四半期比で横ばい、前年比で一桁の伸びとなりました。200mm ウエハーは前四半期比で横ばい、前年比では減少しました。300mm のお客さまの投入は回復基調にあると見ています。 ・ 半導体デバイス市場は、金額ベースでは AI 向け高単価の影響で過去最高を更新しています。一方、IC 数量ベースでは 2022 年のピークには届いていません。ウエハーの需要は半導体 IC の数量に相関があります。
Q	半導体ウエハーの今期 3Q（10-12 月期）以降の見通しについて
A	・ 300mm ウエハーは、10-12 月の受注は堅調です。その先の需要は、お客さまの手持ちのウエハー在庫の消化状況によります。200mm ウエハーは車載向けが、ここにきてさらなる調整に入っていることもあり、しばらく低調と見ています。
Q	半導体ウエハーの中期的な見通しについて
A	・ AI 向け半導体は今後も伸びていくと見ています。また、半導体デバイスにウエハーを 2 枚使う方式も徐々に増えてきており、300mm ウエハー需要は中期的に伸長するものと捉えています。
Q	AI 向け半導体に使用されるウエハーについて
A	・ 300mm ウエハーに占める AI 向け数量比率は 1 割未満です。AI 産業はまだ黎明期と見ており、段階的な息の長い拡大を想定しています。 ・ AI 向け半導体に使用される先端ノード向けウエハーのコストは高く、その価値に見合った価格を随時お客さまと相談し決めています。
Q	半導体ウエハーの設備投資について
A	・ 当社の 300mm ウエハー事業は長期契約をベースに行っています。増設はまず建屋を作ることから始まり、状況に応じて設備を入れ稼働を開始するという流れを繰り返しています。 ・ 2Q は建屋が完成したところがあり投資額が膨らみました。建屋は長期間の償却ですので、減価償却費が急激に増えるわけではありません。
Q	200mm ウエハー事業について
A	・ 200mm ウエハーの需給は緩んでいますが、中期的に市場はディスクリート系を中心に成長すると見ています。半導体デバイスメーカーが、どのような事業に取り組むかによって、当社の事業の方向性も変わると考えています。

Q	レア・アースの市況変動による磁性材料事業への影響について
A	・ 希土類磁石については、原料であるレア・アースの価格に連動した価格で取引しています。そのため、レア・アースの価格が上昇すれば、期ズレがありますが、当社の希土類磁石の価格も上がります。加えて、追加注文分については別建ての価格を適用しています。 ・ 事情が大きく変わっているので、抜本的な価格改定に取り組みます。 ・ 当社は重希土の分離精製や、リサイクルの能力を保有しているほか、重希土の使用量を抑制する技術も確立しており、有効に利用しています。 ・ 原料の確保を含めて供給体制の多角化を図っています。
Q	電子材料セグメントの中期的な見通しについて
A	・ 特に露光材料のフォトレジストとマスクブランクスについては、当社は先端向けを中心に販売しています。そのため AI 関連の市場の状況は、これらの露光材料の業績に如実に表れており、供給体制を拡充していく状況にあります。また、当社は様々な半導体製品に関与していますが、AI 銘柄というような展開を示すべく取り組んでいる真っ最中ですよ。

〈全 社〉

Q	今期の通期予想について
A	・ 10 月以降の想定為替レートをやや円安に見直した一方で通期予想は据え置いています。下方修正の要素はありません。半期を経過した時点で通期予想に対する進捗率は 50%を超えており、この予想を達成すべく取り組んでいます。
Q	資本配分と株主還元について
A	・ 資金は事業の拡張、成長に向けた再投資を第一に考えつつ、株主還元と両輪でしっかりと活用していきます。 ・ 株主還元の中心は配当で、自己株式の買い取りはその都度状況を見ながら機動的に行うという方針に変化はありません。 ・ 配当は長期的かつ安定的に行うことを基本方針としています。その上で、現在、配当性向の目安を 40%としています。当然、この数字をさらに上げていくことも考えながら取り組んでいます。